

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

サヨナラのイミ

【作者名】

ガーネット

【あらすじ】

少女は願った少年の幸福を
そして願わくばそこに自分が
存在していないことを。

少年は願った自分達が
幸福であることをそして
少女と共にいることを。

2つの願いは似て非なるもの
けして交わることはないと

プロローグ

嫌われてもかまわない
あなたを 守れるのなら
これは これだけは嘘じゃ
ないよ？ レシェル
私の愛しい人

目の前には大切な人
背後には憎むべき敵
でも、私は背後の存在を
完全に無視していた。
だって、あいつが憎いのは
本当だけど大切な人
レシェルを逃がす方が
大事だし。

うん。比べるだけおこがましいわ
とはいえ どう説得したら
いいのかしら

「ここは危ないわ。早く逃げなさい」
これで引いてくれるとは思つてない
けど

「嫌だよ！そんなことをしたら君は!!」

やつぱり駄目か

「レシェル、さよなら、しましょ？」

昔はこんなふうに言い聞かせるとなんでも
聞いてくれたなあ

「嫌だ!!僕はもう君を失いたくない!!」
ふふつさすがに小さい頃みたいには

いかないかあ

「

「君と 離れたくない」

「つ !!」

そんなこといわないでよ
決意が 摺らいじやいそつ

だよ

でも、私は 貴方を守れるのなら

「 大丈夫」

「リーシュ ?」

レシエルが私の方を不思議そうに見る
「 もよなうりつて言葉は「お別れ」の言葉じゃなく
てまた会いましょうつていう「約束」なんだよ?」

「

「だから ね? 大丈夫」

「 わかった」

良かつた。

「うん。いい子ね」

「めんね?

信じてるから」

「ありがとう」

「さよなら」

「うん。さよなら」

ああ、行つちやつた。

「自分で突き放しておきながら
なにいつてるのかしら

さて

「とても愚かだねリーシュリア」

「 そろそろこいつ消していいかな?」

「うるさい 塵になりたいの?」

や、塵ひとつでも残つてゐつて考え

るだけで気持ち悪いな。

「それは嫌だな。君の場合冗談にならないからね」「当然よ。あんたは存在そのものが罪なんだから」

さあ 終わらせましょ。ひ。

私の夢も、

こいつの馬鹿馬鹿しい妄想も
「いいのかい? もう一度と彼には
会えないよ?」

「私は、後悔しない」

全ては 貴方のために

レシエル

「後悔しない、か 」

ホントはチガウ

貴方に会いたい

もつと一緒にいたい

「駄目だな 私、こんな時まで

嘘つきだ

ごめんね? レシエル。

私がこんなに嘘つきで

「ううん。最後くらい素直になら
ない」とだよね

そう、最後なんだから。

「みんな、今まで本当にありがとう

『めんなさい』

「レシエル大好きだよ

ずっとずっと大好き

「今度会った時はもつと素直に

なりたいな

」

「

さよなら

」

e p.i s o d e 1 → 追憶

どうしてこんなことになってしまったんだろう

「私は、

僕は、

守りたかった。

一緒にいたかった。

ただ、それだけだったのに

ねぇ、どうして？ 教えてよ
レリイ イクス 」

それは、確かに存在していた二人の過去の記憶、ずっと続くと思っていたでも、過ぎ去ってしまった大切なオモイデもつぶることの許されない二人を少しだけ優しい過去の夢にいざないましょう。今だけは、穏やかな夢の中でもぐるんでいてほしい。

きっと、幸せだから

人里離れたどこかの森の奥、一人の少女が何をするでもなくただ立っていた。やわらかい金の髪を風になびかせサファイアの瞳は色彩の少ない森を映していた。

そこに、

「母様!! じゃなかつた えつと、

レリイ!!

少年が一人駆け寄ってきた。

「ふふ レシェル、まだその呼び方は慣れないみたいだね?」

少女、レリイは少し可笑しそうに笑いながら言った。

「『ごめんなさい』をつきイクスにも怒られたばかりなのに」

レシェルは申し訳無さそうに謝った。

「もう、イクスは 怒っちゃ駄目だつて
いったのに 」

レリイは彼女にしては珍しく少し怒っていた。

「ううん、何度も言われてるのに間違えちゃう
僕が悪いんだよ。だからイクスはわるくないよ?」

レシェルはイクスは悪くないというが、

「そんなことないよ? イクスはレシェルより

年上なんだもの。もつと耐えるって事を覚えないとい

「で、でも間違えちゃったのこれで253回目だし

レリイも嫌でしょ?」

レシェルは律儀にも間違えた回数を数えていたが、

だが、

「正確には255回ね。私は気にしないよ?」

大丈夫。

もつと律儀なのがここにいた。

「う、うん。」

「それよりも 今日はテストをしようか?」

レリイはレシェルの亞麻色の髪を優しく撫でながら言った。

「テスト?」

レシェルはレリイの急な発言に首を傾げる。

「うん、今までのことをやると理解できてる

かを実践でテストするの

レリイはその視線をちらりと森の奥へと向けた。
「出来るかな？」

レリイは少し心配そうな顔をしてレシェルに尋ねる。

「大丈夫、僕頑張るよ」

レシェルは表情を引き締め腰につけていた剣を手にした。
その瞬間穏やかだった森に殺気が満ちた。

「出てきたらどうですか？臆病者な暗殺者さん達？」
なるべく緊張を悟られないように相手を
少し挑発した。

「 隨分威勢のいい餓鬼だな けど、

テメエには興味ねえ。俺らの狙いはあんただ

”殺人姫”（さつじんき）

いつの間にか黒い服を身にまとつた複数の男達が
レシェル達が逃げられないように二人のまわりを
囲うように立つていた。

レシェルの挑発に応えたのは彼の目の前に立つている
リーダーらしき男のようだ。

「レリイをそんな風に呼ぶな !!」

レシェルは男の発言に怒り狂うが、
「レシェル」

殺氣に満ちたこの場所には相応しくないほど
涼やかな声でレシェルを諫めたのはレリイだった。
「ダメだよ？そんな挑発に乗つたりしたら。私が
教えたこと忘れないで」

「 相手の発言は一言一句聞き逃すな。それが
戦いにおいて自分が有利になる鍵だから。
でも、その発言に感情を持つなそれは、愚かなこと
だから だよね？」

視線は相手から離さずにレシェルはレリイに教えられた言葉を復唱した。

「そう、それでいいのよ。ああ、はじめましょう?」
レリーの声を合図に闇にの火蓋がおとされる。